

■特集■校正を考える

校正あれこれ

齋藤佐知子

「心の花」誌の校正作業に携わることになったのは三十年以上も昔のことである。記憶もおぼろになってしまったが、その頃は由幾先生を中心に十人ほどが集まり、寄り添うようにしてゲラと向き合い一日を過ごしていたものである。当時の総ページ数は四十から五十ページだったので、この人数と時間でこなすことが出来たのである。その後現在にいたるまでに何人かの先輩が引退し、とうとう私が校正担当のチーフということになってしまった。責任を果たしているとは到底思えず忸怩たる日々を送っているのだが、そのなかで、折り折りに思い出し、励まされている言葉がある。

これも二十年以上も昔の話であるが、ロシアがまだ社会主義国であった頃、モスクワに住む詩人達の、秘密の集まりを取材した、TVのインタビュ番組を見た時のこと、その中のひとりの青年が言ったのだ。「僕は恋人もパンもいらぬ。ただ、自分

の詩を発表する場所が欲しいだけなのだ」と。当時のモスクワでは、思想や信条の自由が無く、国家の意思に反する作品は厳しくチェックされていた。どこにも発表する場所が無い詩。少なくとも言葉をもって自己表現しようとする者にとつて、これほど辛い話はないだろう。あるいは誰にも読まれなくてもいい、自分自身のために書くのだ、という考えもあるだろう。しかしそれは、いつでも発表できる、という前提のもとでのことだろう。

さて、現在の日本ではこのような事態は起こらないし、ナンセンスだと思われるだろう。そう願いたい、歌を詠む私達の発表の場はまずは結社誌であり、「心の花」の会員の場は「心の花」誌ということになる。信綱の「心の花」創刊の辞は「心の花は深く日本の文学を究め、歌を広めようと、おそれおおくも我らの起こしたものである・・・」と始まる。個人の思想であ

れ、広く文学を憂えることであれ、思う所を自由に発表する場がいかに大切か、たまたま時代も国も異なる二人の言い及んだ「場」が、私の中で重なっているのである。現在の「心の花」誌は、編集長幸綱先生以下、編集実務、会計、発送などそれぞれの担当によって運営されているが、校正というのはその中でも最も地味で目立たない存在である。地味とはいえ、会員の作品発表の大切な場の、形となる最後の部分を担っていることが、私の密かな自負であり、支えなのである。これは私だけではない。校正メンバー全員の気持ちでもある。

ところで、「校正」という仕事について、その実態に詳しい人は少ないであろう。今回の特集で私達の役割と仕事を知っていただけのことをうれしく思う。そのために、加古陽氏には新聞というメディアからの報告を、犬飼氏には毎月の「心の花」誌の、誤植の調査を通じての感想を寄せていた